岩手県立博物館だより

Newsletter of the Iwate Prefectural Museum
岩手県立博物館ホームページアドレス
http://www2.pref.iwate.jp/~hp0910/

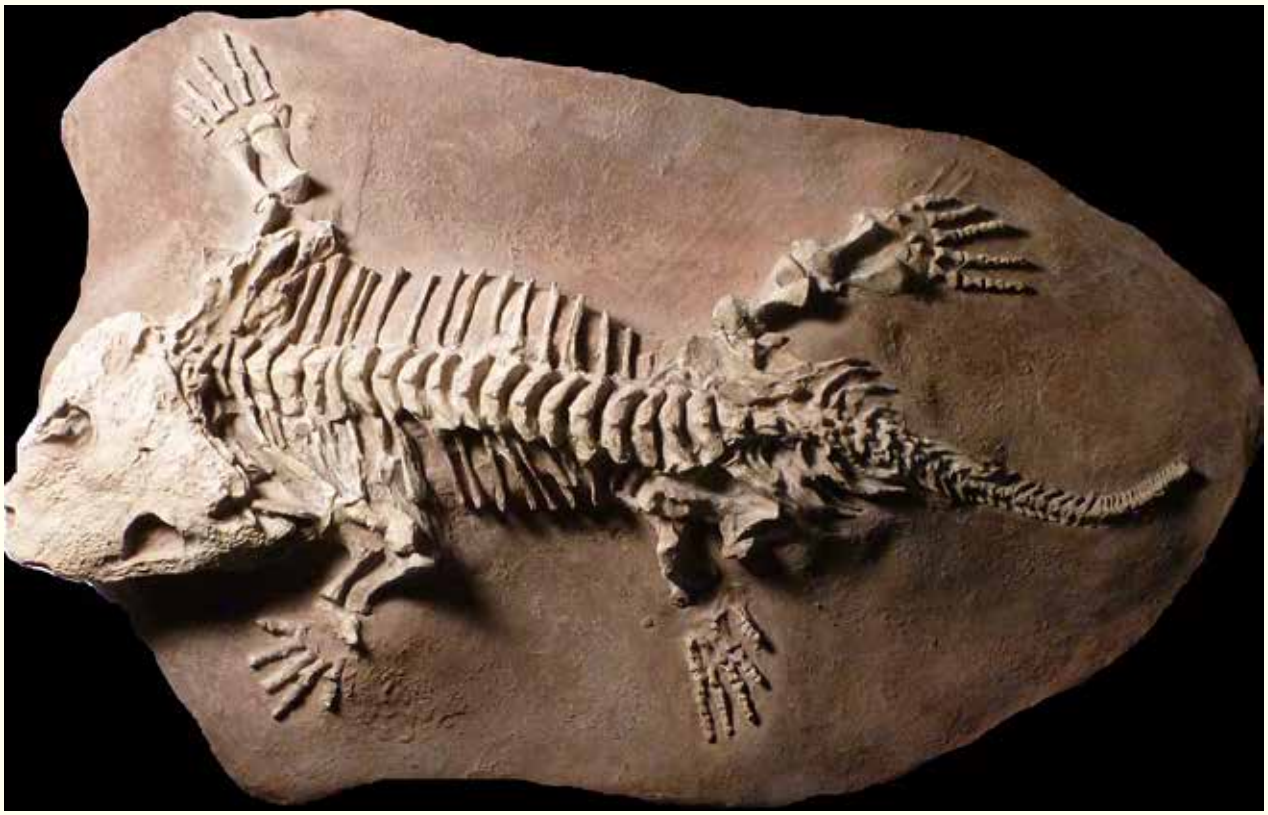
2016. 6 No. 149

目次／第 67 回企画展「古生代の大量絶滅と回復－進化の影と光－」からペルム紀に絶滅した両生類セイムリア（複製）**表紙**／館長挨拶「着任にあたって」**p.2** ／活動レポート「日米親善大使『ミス岩手』の里帰り」「岩手県立平舘高等学校との連携プロジェクト」**p.3** ／展覧会案内「古生代の大量絶滅と回復－進化の影と光－」**p.4-5** いわて文化ノート「土偶日本一岩手県、岩手のブランド『大型遮光器土偶』」**p.6-7** ／インフォメーション **p.8**

第67回企画展 国立科学博物館・コラボミュージアムin盛岡

古生代の大量絶滅と回復－進化の影と光－

平成28年6月7日(火) ～8月21日(日)



ペルム紀に絶滅した両生類セイムリア【複製】

（当館 蔵）

顕生代にはこれまでに5回の大規模な大量絶滅が生じたと考えられています。本企画展では、岩手県内にもその地層が見られる古生代末に生じた生命史上最大の大量絶滅事件を中心に、古生代各時代に絶滅した生物と、繁栄した生物について紹介します。

■館長あいさつ

着任にあたって

館長　髙 橋 廣 至

早いもので館長に就任してから２ヶ月が過ぎました。毎朝、盛岡市内より北に向かって車を走らせ博物館を目指していますが、徐々に大きくなる雄大な岩手山の姿を見るにつけ、啄木ではありませんが襟を正す気持ちになります。

「知らぬ土地に着いたら、博物館に行く労をいとうな」とは、作家で旅行家でもあったスタンダールの忠告です。それぞれの町にはそれぞれの遺物が、多くの研究者や専門家の手によって集められています。折角旅に出たのなら観光だけでなく、その土地の歴史や文化も知れ、というスタンダールの言葉と思います。私もこの忠告を守るべく、出来る限り旅先では博物館・美術館に足を運ぶよう心がけています。岩手県立博物館におきましても県民の皆様にはもちろんのこと、遠路遙々県外・国外から訪れた方々が、「来た甲斐があった。」と思われる博物館を目指して参りたいと考えています。

さて、この４月、前館長の中山敏氏の後を引き継ぐことになりました。前館長は2012年に着任し、特にも東日本大震災津波の後、大津波被災文化財保存修復連携プロジェクトを立ち上げ、会長として全国各地で展覧会、ワークショップ等を開催し、今後の文化財再生の進展に資する活動を展開されてきました。そして、このプロジェクトによって、今後発生する大規模自然災害時に対する準備が全国各地で進展することも期待されています。中山前館長には被災後の４年間、県内外の博物館復興のために多大なるご尽力をいただき、心から感謝申し上げます。

今後、私も歴代の館長が築き上げて来られた理念と使命を継承して行かなければならない立場にありますが、平成20に制定された「岩手県立博物館使命書」に則り、事業の推進を図って参りたいと考えています。

使命書には「私たち岩手県立博物館は、５億年にわたる大地、多様な生物相、縄文・平泉などの歴史的変遷、地域性豊かで多彩な民俗事象を背景とし、広大な岩手の地域的特性を活かしながら新たな価値の発見に努め、県民の要請に応えて県民とともに歩む博物館として機能を強化し、新たな地域文化の創造を目指す」ことが記されています。

この使命書に基づき、県民と一体となった博物館活動の促進を図りたいと考えております。多くの方に繰り返し足を運んでいただき、「楽しかった。為になった。もう一度来てみたい。」と思われる『身近で愛される博物館』となるよう取り組んで参ります。今後とも皆様のより一層のご支援をお願いいたします。

■活動レポート

普及事業を支えるボランティアの活動

ミュージアムシアター映写ボランティア「シネマ友の会」

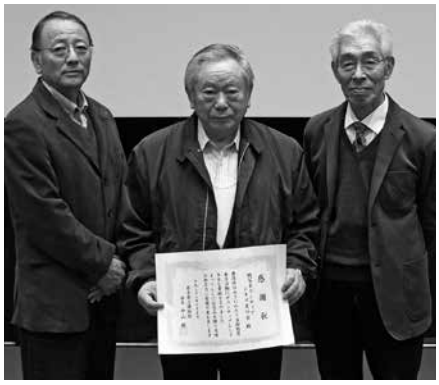
博物館では毎月第１土曜日に中央地域視聴覚ライブラリー（盛岡教育事務所管内市町村の共同出資で設置運営）との共催で「ミュージアムシアター（映画会）」を開催しています。

この映画会で映写をご担当いただいている盛岡教育事務所映写ボランティア「シネマ友の会」の当館における活動が10年の節目を迎えました。

そこで、日頃の感謝の意を込めて、３月５日（土）の上映前に感謝状贈呈式を執り行いました。式では映画会のお客様からも温かい拍手をいただき、和やかなひとときとなりました。

【シネマ友の会の皆さん】

佐藤勲さん（83歳）、藤田栄三郎さん（78歳）、松尾庄三さん（78歳）、金濱芳孝さん（68歳）



（学芸第三課　川向富貴子）

■事業報告

バーミングハム公立図書館からの贈り物 日米親善人形『ミス岩手』の里帰り

平成 27 年 12 月 23 日 (水) ～平成 28 年 3 月 6 日（日）

岩手県立博物館では、米国アラバマ州、バーミングハム公立図書館、株式会社吉徳の御支援により、『ミス岩手』を公開しました。

昭和２年春、日米関係の悪化を懸念した米国宣教師のシドニー･L･ギューリック博士をはじめとする両国の友好・親善を願う人々の尽力で、米国から１万２千体をこえる『青い目の人形』が日本に贈り届けられました。その年の秋、渋沢栄一氏が中心となり、愛くるしい58体の大型市松人形が、わが国から答礼人形として米国に贈られました。

ミス岩手もその一つで、バーミングハム公立図書館に迎え入れられ、大切に保管されてきましたが、経年劣化が進んだため、株式会社　吉徳の工房で修理することになり、平成27年8月に日本に運び込まれました。修理後、米国に戻るまでの間、岩手県立博物館での公開が許可され、88年ぶりに、里帰りが実現しました。

ミス岩手の公開では、岩手県陸前高田市立気仙小学校所蔵（陸前高田市立博物館寄託)、『青い目の人形』を並べて展示しました。米国から贈られた青い目の人形は戦時中、軍の命令で焼却処分される運命にありましたが、気仙小学校の人形は、女性教師の機転で難を逃れることができました。東北地方太平洋沖地震の後襲来した大津波によって流出し、一時行方不明になりましたが、その後無事発見され、岩手県立博物館で安定化処理が施されました。戦争と東日本大震災という、２度の危機を乗り越えた人形です。今回の展示を通し、それぞれ見知らぬ国で友情の絆を深めてきた２つの人形が、歴史的対面を果たすという、貴重な機会を設定することができました。この状況はマスメディアを通じ広く公表され、多くの方々の共感を呼びました。対面を終えた２体の人形は再び、それぞれが担った役目を果たすため、新たな旅に出ました。

『ミス岩手』と『青い目の人形』の対面

（首席専門学芸員　赤沼英男）

■活動レポート

岩手県立平舘高等学校との連携プロジェクト

体験学習室ハンズオン資料ドレスの制作

博物館では学校教育との連携を図る新たな取り組みとして、県立平舘高等学校家政科学科（八幡平市／岩渕健一校長、加藤幸美教諭指導）との共同プロジェクトを立ち上げ、１年を通じて活動を続けてきました。

当館は、明治中頃に岩手県令（現在の知事）の職を務めた石井省一郎氏の妻・應子（あつこ）氏が鹿鳴館で着用したとの言い伝えが残る2種類のドレスを所蔵しています。

プロジェクトでは、ファッションデザイナーの二宮柊子（にのみや とうこ）・経沢洋美（つねざわ ひろみ）両先生をアドバイザーに迎え、その明治時代のドレスをモデルとするハンズオン資料の制作にあたりました。

作業は課題研究の授業の一環として行われ、同校被服班に在籍する３年生９名の皆さんが取り組みました。

そして、平成28年２月、完成披露・引渡式の日を無事に迎えることができました。成果品は、２月下旬から当館体験学習室「身につけるコーナー」で活用しています。ぜひ、高校生が手掛けた作品に会いに、博物館へお越しください。

ドレスを作成した平舘高校被服班

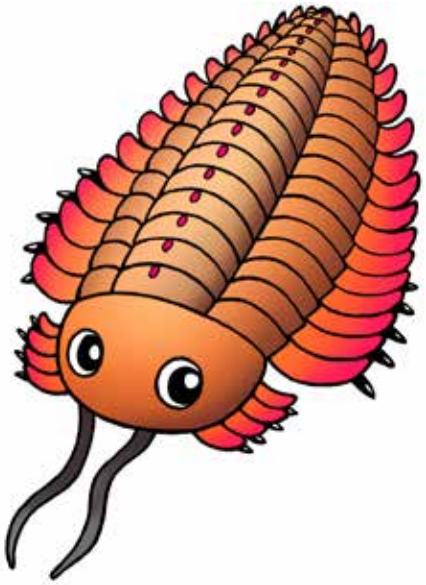
ハンズオン資料ドレス

（学芸第三課　川向富貴子）

■展覧会案内　国立科学博物館・コラボミュージアム in 盛岡

第 67 回企画展「古生代の大量絶滅と回復ー進化の影と光ー」

会期：平成28年6月7日（火）～平成28年8月21日（日）



オルドビス紀の三葉虫
トリアルトゥルス（生態復元想像図）

今年度の企画展は、国立科学博物館とのコラボミュージアムとして、古生代に起きた生物の大量絶滅の展示を行います。会場では、大量絶滅によって地球上からいなくなってしまった生物と、その後の時代に出現し、繁栄した生物について紹介します。今回の展覧会案内では、本企画展の“主役”となる生物たちを少しだけご紹介したいと思います。

■オルドビス紀末の大量絶滅

オルドビス紀は古生代の第2の時代です。この時代の末期に、大規模な大量絶滅が生じました。この時の大量絶滅によって、特に影響を受けたのは浅い海に住んでいた生物たちと言われています。

この時代に繁栄していた三葉虫も例外ではありませんでした。

オルドビス紀の三葉虫化石（化石）
トリアルトゥルス（当館蔵）

シルル紀のウミサソリ
エウリプテルス（生態復元想像図）

三葉虫は背中から見た時、「左葉」「中葉」「右葉」の縦に3つに分かれるように見えることから、その名前が付けられた節足動物です。オルドビス紀は三葉虫の種類が最も増えた時代と言われておりますが、オルドビス紀末の大量絶滅でその数を大幅に減らし、以降の時代において、オルドビス紀ほどの多様性を見せることはなかったと言われています。

■シルル紀に繁栄したウミサソリ

オルドビス紀に続く時代のシルル紀に繁栄した生物にはウミサソリがいます。ウミサソリは名前のとおり、サソリによく似た姿をした海の節足動物です。その姿からサソリの仲間と考えられがちですが、現在生きている生物ではむしろカブトガニに近いと考えられています（諸説あります）。

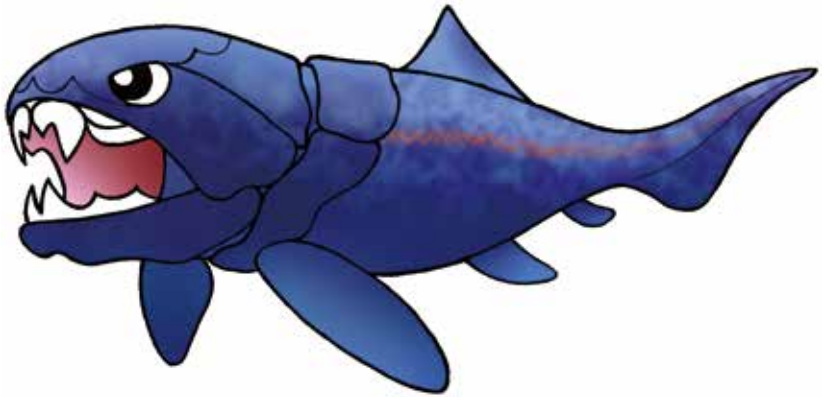
シルル紀のウミサソリ（化石）
エウリプテルス（ミュージアムパーク茨城県自然博物館蔵）

ウミサソリは史上最大の節足動物の一種と言われ、中には2mを超える大きさのウミサソリもいたようです。

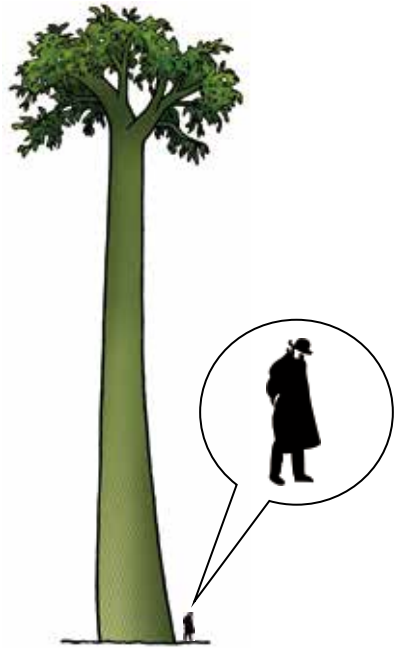
■デボン紀後期の大量絶滅

古生代第3の時代、デボン紀は「魚の時代」とも呼ばれるほど、世界中の海で原始的な魚類が繁栄した時代です。

この時代の覇権を握っていた魚類は“甲冑魚”と呼ばれる、その身を硬い骨質板で固めた魚たちでした。中でも、体長7mを超え、頑丈な顎と巨大な歯を持つダンクレオステウスは、当時の生態系の頂点に立つ生物であったと考えられています。しかし、こうした甲冑魚たちもデボン紀後期に起きた謎の大量絶滅によって大幅に数を減らしてしまいます。



デボン紀の甲冑魚（板皮魚類）ダンクレオステウス（生態復元想像図）



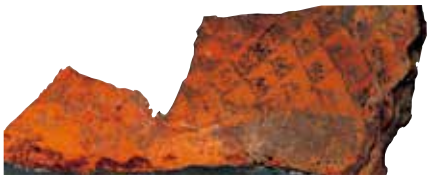
石炭紀のリンボク（生態復元想像図）

■石炭紀の大森林

デボン紀に生じた大量絶滅後の石炭紀という時代には、陸上で広範囲にわたって巨大な森林が形成されました。

当時森林を形成していた植物は、巨大なシダ植物の仲間が主であったと言われています。特に、幹の皮が魚のウロコのような模様をしたリンボクという植物の中には、大きいもので高さ40 mにも達する種がいました。これは現在の建物で言えば、13階建てのマンションと同じ位の高さです。

こうした植物たちは、死後地中に埋もれた後、長い時間をかけて石炭へと変わっていきました。石炭紀と言う名前は、この時代の地層から多くの石炭が産出することから名付けられました。



釜石市で産出したリンボクの化石（複製）
石炭紀よりも古いデボン紀のリンボクで、報告されている中ではほぼ国内最古の植物化石

ペルム紀の単弓類（たんきゅう）
ディメトロドン（生態復元想像図）

■ペルム紀末の史上最大の大量絶滅

さて、大量絶滅と聞くと、多くの方が想像されるのが中生代白亜紀末に起きた恐竜等の生物の大量絶滅ではないでしょうか。しかし、古生代最後の時代、ペルム紀の終わりには、それよりもずっと大きな規模で大量絶滅が生じました。

史上最大と言われているペルム紀末の大量絶滅では、海の中の生物のじつに96%が絶滅したと言われています。この絶滅により、古生代の３億年間を生きてきた三葉虫は地球上から完全にその姿を消しました。

また、その影響は陸上においても深刻であり、われわれほ乳類の祖先と考えられている単弓類（たんきゅう）も絶滅寸前にまで追い込まれました。もしこの時、単弓類が全て絶滅してしまっていたら、私たち人類は今ごろ地球上にはいなかったのかもしれません。

■三畳紀の生態系の回復

非常に多くの生物を葬り去ったペルム紀末の大量絶滅ですが、続く中生代三畳紀には、わずかに生き残った生物たちが再び繁栄を始めました。

中生代を通して地球上の主役となったのは、は虫類たちでした。三畳紀には陸で恐竜、空で翼竜、そして海では魚竜が出現しました。特に、魚竜は三畳紀のかなり早い段階で地球上に姿を現したとされており、三陸海岸の三畳紀前期の地層からはウタツサウルスと言う世界最古とされる魚竜の化石が見つかっています。

■今、そこにある大量絶滅の危機

大量絶滅は決して大昔の出来事とは言い切れません。今われわれが生きているこの時代にも、大量絶滅が生じる危険性があることが指摘されています。

日本では、現在絶滅が危ぶまれている生物が、動物・植物あわせて3,000種類以上もいると言われています。果たしてどのような生物が絶滅の危機にあるのでしょうか？ そして、その原因は何でしょうか？

是非、皆さんの目で確かめにいらしてください。

（学芸員・望月貴史）

三畳紀の魚竜
ウタツサウルス（生態復元想像図）

■いわて文化ノート

土偶日本一岩手県、岩手のブランド「大型遮光器土偶」

主任専門学芸員　金 子 昭 彦

岩手県立博物館の遮光器土偶は、漫画家吉田戦車氏のエッセイ『吉田電車』（講談社文庫）にも登場し、スネカ、氷冷蔵庫とともに当館人気ベスト３に入っています。私は、静岡県の出身で東京の大学で考古学を専攻し、土偶を研究しています。縁もゆかりもない私が岩手県にやってきたのは、岩手県の土偶出土数が日本一だからで、“御上りさん”なのです。

■縄文時代と土偶の多い場所

土偶が作られた縄文時代は、土器を使うようになってから、農耕が主な生業になる弥生時代の前までの時代で、今から約15,000年前から約2,800年前まで、１万年以上続きました。大部分が氷河時代の後に当たり、温暖な気候の中で狩猟採集の生活をしていました。長く続くので、草創期、早期、前期、中期、後期、晩期と区分しています。「縄文文明」などともてはやされることもありますが、青森県三内丸山遺跡の時期（中期）に、エジプトでは既にピラミッドがありました。

実は、日本で最も土偶が多く出土したのは、やはり三内丸山遺跡です（約2,200点）。それなのに、なぜ岩手県が日本一（6,500点以上）になるかというと、青森県（4,000点以上）は中期には多いですが、その後の後～晩期には岩手県の方が多く作られるようになるからです。

このように、土偶の数は、縄文時代の時期・地域によって偏っています。おおむね遺跡や住居や土器が多い時期・地域、つまり、その当時繁栄した場所に多いのです。なぜ繁栄した場所が変わるかといえば、気候が変化するからです。動植物は気候の変化に敏感で、例えばサケはある程度以上暖かくなると遡上しなくなります。自然のものをとって暮らしていた縄文人は、食べるものを追いかけて引っ越しするしかなかったのです。

■大型遮光器土偶の魅力と特徴

遮光器土偶は、東北地方・晩期の土偶で、身長20cm以上で中が空洞の大型品を基本としますが、15cm以下の空洞でない小型品も作られました。大型の遮光器土偶は、少しずつ形を変えながら約200年間、その後目を粘土で貼り付けるように変わって（図４の１）から、さらに約100年間作られました。

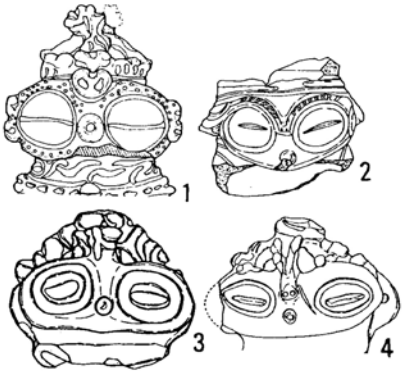
最も有名な土偶と言って良く、『ドラえもん』、星野之宣氏や花輪和一氏など、登場する漫画は枚挙に暇がありませんが、ここでは、石ノ森章太郎氏『人造人間キカイダー』の最後に登場する悪の巨大最終兵器ロボット「アーマゲドン」は、青森県亀ヶ岡遺跡出土の重要文化財がモデルになっていることを挙げておきます。

縄文時代の人も、大型遮光器土偶にはインパクトを感じたようで、東北地方の土偶なのに、それを真似た土偶は、関東地方を中心に近畿地方まで非常に広い範囲に見られます。

なぜ真似たものとわかるかと言えば、目が図１の１の“本場のもの”と明らかに違うからで、２～４のように、中央の横線が両端の楕円形の区画線に届いてないか、歪んでいる場合がほとんどだからです。それほど難しくもないのに、なぜ正確に真似しなかったのでしょうか。それは、後で述べる証拠から、その製作が厳しく管理されていて、模倣品であることを明示する必要があったからでないかと思います。つまり、“にせブランド”の製作が禁じられていたのではないかと。

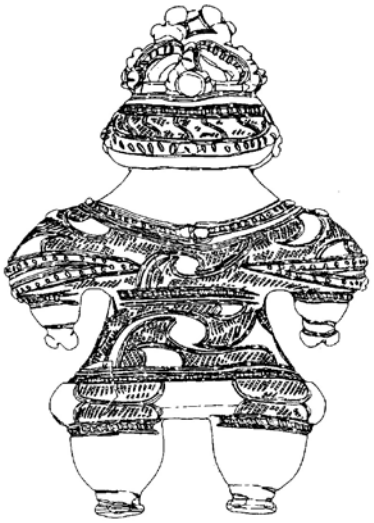
大型遮光器土偶は、他の土偶に比べ互いによく似ていて製作地が限られていた可能性が高いのです。発見される場所も偏っていて、私の集計では、岩手県では317点、秋田県で101点、青森県は116点ですが、そのうち97点は岩手県と隣接している八戸市周辺からの出土です。宮城県は９点と非常に少なく、山形県（９点）と福島県（２点）は、東北地方でもほぼ模倣品のみです。

次に、模様から推測される製作場所です。図２の大型遮光器土偶の背中の模様の縄文のない部分を注目してください。真ん中の紡錘形の白抜き部分を、早稲田大学の高橋龍三郎先生は、岩手県に特徴的な模様と言いました。現在では、この



１：盛岡市手代森遺跡出土、２：福島県、
３：埼玉県、４：静岡県出土。
４は『静岡県史』、他は各報告書より転載。

図１ 大型遮光器土偶の本物と模倣品



佐々木和久（1984）より転載。

図２　久慈市二子貝塚出土品の背中

模様は、岩手県に隣接する八戸市周辺にも広がることがわかっています。

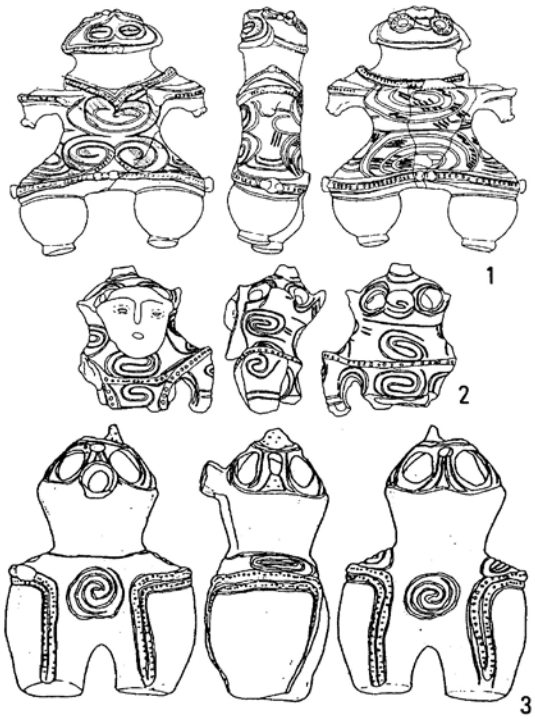
以上から、図３に示したように、大型遮光器土偶は、青森県東南部～岩手県で作られ、秋田県、宮城県（一部）を含む範囲でほぼ流通し、それより離れた地域では模倣品が作られていたことがわかりました。大型遮光器土偶の全てが背中に同じような模様を持つわけではなく、その他の模様が青森県東南部～岩手県に特徴的かどうかまだわかっていませんが、少なくとも広がりは同じです。

図３ 大型遮光器土偶の製作・流通・模倣

このように特徴的な広がりを示す大型遮光器土偶も、目の表現が変化してから様子が変わってきます。山形、福島県でも本物とよく似た土偶が見られ、“伝言ゲーム”のように、遠く離れるほど変異が大きくなり（図４の１→２→３）、山梨県出土のもの（図４の３）は、土偶であるか判断に迷うほど変容しています。

■大型遮光器土偶はブランド品？

しかし、こうした変化の方が、方言と同じで、私たちには納得のいくものではないでしょうか。これに対し、その前の方は異常とも言え、青森県の一部を含みますが、まるで“岩手のブランド品”とも言えるあり方を示しています。大型遮光器土偶は、現代の陶芸家でもなかなか真似できないくらい薄く緻密に作られており、確かにブランド品にふさわしい出来栄えです。



１：一関市相ノ沢遺跡、２：群馬県、３：山梨県出土。
２は藤巻・石坂（1996）、他は各報告書より転載。

図４ 目が変わった後の大型遮光器土偶の伝播の仕方

こうしたものを生み出した亀ヶ岡文化は、世界の先史文化の中でも特異なものとして、近年世界的にも注目され、その社会には身分の差があったのではないかとさえ言われています。そうした社会であったために、製作・流通を制限する“ブランド品”が出現したのでしょう。

大型遮光器土偶も目の表現が変化する最後のころには、既に西日本では本格的な米作りが始まり、逆に亀ヶ岡文化は衰退期に入ったため、ブランド品として成り立たなくなってしまったのではないでしょうか。

なお、岩手県でも、奥羽山脈や沿岸部には遮光器土偶は少なく、この地域は縄文時代を通じて土偶は多くありません。ただし、全く出土しないわけでもないことが重要です。

■定説と土偶の用途

土偶は村祭りに使われたと言われていますが、０点から三内丸山遺跡の2,200点まで、遺跡による出土数の極端な偏りや、少ない地域でも全く出土しないわけでもないこと、さらにブランド品のような現象は、土偶を個人の所有品と見なした方が都合が良いのではないでしょうか。出土数の極端な偏りは、土製耳飾りにも共通する現像です。

さらに、土偶を豊穣祈願に使ったという定説がありますが、上述のように土偶は豊かな時期・場所にしか作られません。反対に、関東地方の後期初めのような遺跡や住居、土器の少ない時期には作られないので、豊穣を求めたいはずの時期・地域には土偶はないということになり、矛盾しています。

最後に、土偶をわざと壊した証拠がなく、壊したとする研究者もそのことを認めていると知ったら、皆さん驚くでしょうか。証拠よりなにより、土偶がバラバラであること（“殺人”？）を、人は冷静に見つめることができないのでしょう。土器がバラバラで出土することは気にも留めないのにです。

このように、定説となっている土偶の説明にほとんど証拠はなく、今後の研究に委ねられていて、土偶が日本一多い岩手県の果たす役割は大きいのです。

岩手県立博物館
IWATE PREFECTURAL MUSEUM

インフォメーション 〈2016.6.1～2016.9.30〉

お知らせ

●夏の臨時開館
平成28年8月1日(月)、8月8日(月)、8月15日(月)は臨時開館します。
平成28年7月26日(火)～8月21日(日)は無休、翌8月22日(月)は休館です。

●資料整理に伴う休館
平成28年9月1日(木)～平成28年9月10日(土)は資料整理のため休館します。

●敬老の日 65歳以上入館無料
平成28年9月19日(月・敬老の日)は、65歳以上の方は無料で入館できます。

●いわて文化史展示室閉鎖
いわて文化史展示室は秋の展覧会会場として使用するため、平成28年8月上旬から平成28年12月中旬(予定)まで通常の展示をお休みします。

展覧会

●第67回企画展「国立科学博物館・コラボミュージアムin盛岡
古生代の大量絶滅と回復 ―進化の影と光― 」
平成28年6月7日(火)～平成28年8月21日(日)　特別展示室
古生代末に生じた史上最大の生物大量絶滅事件を中心として、古生代に起きた3回の大量絶滅について紹介します。
※詳細はp.4-5展覧会案内記事をご覧ください。
◆展示解説会(一般向け)　14:30～15:30　要入館料
6月11日(土)、7月31日(日)、8月7日(日)
◆展示解説会(子ども向け)　10:30～11:30　高校生以下無料
8月1日(月・臨時開館日)、8月11日(木・祝)
◆県博日曜講座　下記「県博日曜講座」の欄をご覧ください。

●特別展「スポーツ博覧会いわて」
●秩父宮記念スポーツ博物館巡回展
平成28年9月22日(木・祝)～平成28年11月27日(日)
特別展示室・いわて文化史展示室
※詳細は次号で紹介いたします。

県博日曜講座

第2・第4日曜日　13:30～15:00　当日受付　聴講無料
当館学芸員等が岩手の文化や歴史、自然について解説します。
＊展覧会関連講座
6月12日「あの世のはなし」　川向富貴子(当館学芸員)
*6月26日「生命史をひも解く－オルドビス紀・シルル紀－」　望月貴史 (当館学芸員)
*7月10日「岩泉に眠る古生代－中生代の境界地層」　高橋聡 氏(東京大学助教)
7月24日「砂金の母岩をさぐる2」　吉田充(当館学芸第二課長)
8月14日「洞穴に生きる虫たち」　渡辺修二(当館学芸員)
8月28日「資料からさぐる戦時中のいわて」　笠原雅史(当館学芸員)
9月11日「俘囚の大寺院　国見山廃寺」　杉本良 氏(北上市立埋蔵文化財センター)
※考古学セミナー講演会を兼ねる
*9月25日「『スポーツ博覧会いわて』の舞台裏」　原田祐参(当館学芸員)

観察会・見学会(事前申込制)

第71回地質観察会「釜石鉱山跡をさぐる」
平成28年7月3日(日)10:00～15:00　於、釜石市 現地集合・解散
釜石鉱山坑道跡などを見学し、ズリから鉱物・岩石を採集します。
講師：山澤茂行 氏(釜石鉱山株式会社代表取締役社長)
定員：20名(小学校高学年以上、要保護者承諾)
参加費：実費負担(傷害保険料ほか)
募集期間：6月1日(水)～6月10日(金)　定員充足しだい締切

第72回自然観察会「夏山で生きもの探し」
平成28年7月24日(日)10:00～15:00
於、盛岡市藪川 現地集合・解散
盛岡市外山森林公園を歩いて、動物や植物を観察したり、昆虫を採集したりします。
講師：千葉武勝 氏(当館研究協力員)
定員：20名(小学生以上、要保護者承諾)
参加費：100円(傷害保険料)
募集期間：6月10日(金)～7月10日(日)　定員充足しだい締切

観察会の申込み方法：往復はがきまたは電子メールで受け付けます。
詳細はお問い合わせください。

考古学セミナー現地見学会「国見山廃寺を歩く」
平成28年9月17日(土)10:00～12:00　北上市内集合・解散
700を超える堂塔、36の僧坊をもつ大寺院であったと伝えられる古代山岳寺院跡・国見山廃寺を歩きます。
講師：杉本良 氏(北上市立埋蔵文化財センター)
定員：20名
参加費：100円(傷害保険料)
募集期間：8月1日(月)～8月31日(水)定員充足しだい締切
申込み方法：往復はがきに参加者全員の住所・氏名・年齢・連絡先・電話番号を明記の上、当館「考古学セミナー現地見学会係」宛に郵送してください。

週末の催し

◆ミュージアムシアター　※9月はお休みします。
毎月第1土曜日　13:30～15:00頃 前後　講堂　当日受付　視聴無料
平成28年6月4日 (117分／劇映画／一般)
山下清物語裸の大将放浪記
平成28年7月2日「夏休み直前アニメスペシャル」(85分／幼児～小学生向け)
森のなかまたち、からすのパンやさん、どんぐり森へ、いじわる狐
ランボーのなみだ、七夕さま
平成28年8月6日「夏休み映画」(96分／劇映画／小学生～一般)
夏休みの地図

◆チャレンジ！はくぶつかん
毎月第2・第3土曜、日曜、祝日　小学生向け　随時受付
チャレンジ！マークをさがして はくぶつかんをたんけん！
6月11日･12日･18日･19日　テーマ：古
7月　9日･10日･16日･17日･18日　テーマ：魚
8月13日･14日･15日･20日･21日　テーマ：わ
9月17日･18日･19日･24日･25日　テーマ：新

◆たいけん教室～みんなでためそう～　(事前申込制)
毎週日曜日　13:00～14:30　幼児(保護者同伴)・小学生20名程度
さまざまな遊びやものづくり、実験を体験してみましょう。
※4月から全プログラム有料となりました(材料費代／プログラムごとに異なります)。
※要事前申込み。開催日の1週間前の日曜日から電話または博物館で開館時間(9:30～16:30、休館日を除く)に先着順に受け付けます。1度に3名まで予約可能です。予約状況・材料費代はホームページでご確認ください。

6月	5日　チャグチャグ馬コづくり 12日　のびちぢみしゃくとり虫 19日　草花のそめもの 26日　化石のレプリカ	8月	7日　こはくの玉づくり 14日　恐竜ぬりえカード 21日　手づくり万華鏡 28日　まが玉アクセサリー
7月	3日　オリジナル卵をつくろう 10日　ちぎり絵のうちわ 17日　ちぎり絵のうちわ 24日　スライムであそぼう 31日　化石のレプリカ	9月	4日　お休み 11日　3Dメガネで万華鏡 18日　ほのぼのあかり 25日　縄文人のイヤリング

7月24日、7月31日、8月7日は午前[10:00～11:30]と午後[13:00～14:30]の2回あります。

定時解説

平日～土曜日 13:30～14:30／日曜日 10:30～11:30
解説員が常設展示室をご案内します。そのほかにも随時、解説員が皆様のご質問や解説のご希望におこたえしています。
※他の館内イベントとの兼ね合いでお休みする場合があります。
※夏休み期間中(7月26日～8月31日 ※ただし7月24日、7月31日、8月7日をのぞく)は「子ども向け定時解説」を行います。

平成28年度の利用案内

■開館時間　9:30～16:30(入館は16:00まで)
■休 館 日　月曜日(月曜が休日の場合は開館、翌平日休館)
※8月1日(月)、8月8日(月)、8月15日(月)、10月3日(月)は臨時開館
資料整理日(9月1日～9月10日)
年末年始(12月29日～1月3日)
■入 館 料　一般310(140)円・大学生140(70)円・高校生以下無料
(　)内は20名以上の団体割引料金
※9月19日(月・敬老の日)は65歳以上の方無料
※11月3日(木・文化の日)は無料

※学校教育活動で入館する児童生徒の引率者は、申請により入館料免除となります。
※療育手帳、身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方、及びその付き添いの方は無料です。

岩手県立博物館だより
第149号
平成28年6月1日発行

編集　岩手県立博物館
〒020-0102 盛岡市上田字松屋敷34
Tel.(019)661-2831／Fax.(019)665-1214
発行　公益財団法人岩手県文化振興事業団
〒020-0023 盛岡市内丸13-1
Tel.(019)654-2235／Fax.(019)625-3595